

新時代の歡喜

特 藤 田 宮 南

一、尊重す可き元老

先頃自分は某雜誌記者から恣歴な談を耳にした其は政界有數の某老紳士の所へ或日殆ど同時に三通の招待狀が來た、一は官界名士の晚餐會、一は音樂學校の演奏會、今一ツは僅か拾錢會費の青年の集會であつた、所が此大家は前の二會合には出席せず第三の青年小集會に望まれた、記者は早速其の理由を問ふた所大家は笑を湛へて、『私には最早や官界に立つて榮進せんとする望もなし、又音樂に趣味を持たないが併し私の青年至愛の情は君等に到底話す事が出來ない位である』と答へたと云ふ、此の一言に依つて察すると其の大家の心中に『青年愛撫の熱情』が如何に充満して居つたかは火を見るよりも明かである、私は斯る元老の現代に幾多ならん事を欲すると共に又此の大家に對しては無上の尊敬を拂つて感謝したい

一人である。

二、現代の青年と元老

乍併現代我國に於ける元老と青年との關係を一瞥する時に於て聊か悲まざるを得ない元老は曰く『今の青年には元氣なく活氣なし』と、青年は曰く『老毛は須らく辭職す可し吾が椅子を侵しおがら圓熟大成の理想などゝは以ての外あり』と互に敵視して犬猿も管ならぬ有様となつて居る、是は獨り政界のみではなく、學界に於ても實業界に於ても宗教界に於ても皆悉く然りて、其等の原動力であり、中心であり柱であり、生命である所の青年ある事を忘れて單に元老に依つてのみ國家も宗教も學界も實業界も支へられて居るものゝ様へて居る者が多い、だから曾てロンドン、タイムズが『日本は正に下り坂だ』と報じたのも無理あらぬ事だと思ふ、何せあれば宜し元老のみに依つて國家は支へられ宗教は維持せらるゝにせよ若し此の所謂元老が青年を利導し愛護して行かあかつたならば元老遁世後の國家の將來、宗教の將來は

如何にあり行くであらうか、元老果して幾人かある、隈伯の如く生き延んとするも殘余の生命幾年か維持する事が出来るであらうか。故に吾々は總ての事業に於て青年を愛護し青年は元老に隨從し互に相融和して事に當らなければ將來の國家は實に危険の極に達すると思ふ。若し現代に於て老若の融和が出来ない場合には國家も宗教も、學問も實業も皆遂に滅亡の止むなきに立ち至らなければならぬ此の意味に於て自分は青年諸氏の奮起を望むと共に所謂元老の覺醒を促したのである。

三、不言實行の時代

尙ほ又自分は何はねばならない『一現代は如何なる時代ありや』と、今暫らく入滅後を三時代に分ち第一滅後の二千有余年間佛敎所謂正像の時代を『空論の時代』とするならば次に來つた末法始の二百餘年より明治の末期に至る間は『自覺の時代』とする事が出来る、而して末法八百年已後の今日即ち大正の新時代は正しく『實行の時代』である、乃ち吾人が不言實行の意味に於て各自の任

務を果さんとするならば先づ現代思潮が如何なる方向に傾いて居るかを知つて其の進む可き方針を定めなければならぬ、全く今日の如く切迫した時代には場當りの説敎に喝采を得て満足し、輕薄なる文學の稱賛に依つて得意にあり、其場免れの一時的虚偽虚飾に依つて利益を得、マア、主義を實行して危き位置を得て居る様な事では、其人に於て到底何等永久的價值ある活動を認める事は出来ぬ、何うしても眞面目に忠實に自身で之を實行して後、他を導かなければ其の言論に權威なく、他人をして之に心服せしむる事は難いのである。

四、明治より大正へ

翻つて明治より大正に至る間の思想の變遷を考ふるに、明治時代に於ては肉の世界に憧れ唯物論的傾向を以つて進み、何より何まで悉く科學蒐能の拜命主義に於て飾られ遂に忠義も、孝行も、慈善事業も悉く勳章年金、世間の名利と云つた様な世俗的表章と交換せられ、物質的代價を要求せむ

とするに至つた、爲犠牲献身の偽物を生じ、行爲に相應した報酬無しには如何なる聖業でも行はれざるが如き不快極まる傾向を生じ、而も其を實行し能はざるの結果、懷疑煩悶と悲哀とを將來し加ふるに現代生活の壓迫——科學の造り出せし生活にては自己の安心立命の不可能なる事を悟るに至つたのである、此時に當つて一般人民の精神に一大變調を來し精神的慰安を欲求し各人は靈の世界に憧憬せむとし唯心論的傾向に進み、内部の熱烈なる情生命を擴大して其處に何等かの慰安を得て安心立命せむとするに至つたのである、換言すれば大海の一粟にも及ばざる人間が宇宙の大靈ある神佛を頼つて時代に適應した新信仰を得た上で矛盾多き危き世の中に眞面目に奮闘努力を繼續したいと希望を生じたのが大正の新時代であつて吾々青年教家の最も喜ばねばならぬ時である、

五、果して三教會同歩

此の時に際して日本現在の最大缺點は國民全体の信念缺亡にあると覺知した當局者は此が教養に

外護の力を注いだのであつた、其は明治四十五年一月廿五日に現文部大臣たる床次竹二郎氏の幹旋に依つて三教會同と云ふ國家的會合は宗教史の一頁を裝飾するに至つた、併し此は殘念乍ら唯だ『壽司』の御振舞に止まつて無意義のものとなり了つた。次で全年七月八日に第二回會合は催され今度は何等か爲すものと思はれたが此も亦『宴會』に徒歩すらも困難を各宗管長及總代の列席に止まつて其後何等の活動もかく龍頭蛇陀尾に竟つて居る皆を是れ他動的會合であつて、自發的であつた爲めに其の後援外護者を失ふと同時に吾人に、暗中の消火より已上の寂寞を感せしめ、意義なき會合と目せらるゝに至つたのである。

六、自發的會合を要す

若し此の三教會同が自發的であつたならば何等か有意義な事業も三教會同に依つて爲されたに違いない、併し先に行はれた會合の如きは形式上の會合に止まつて居るから若し實行せられたにしても各人の内心には何等將來する事なく、従つて内

部精神に慰安を得る事は出来ない、けれども斯様な事實があつたと云ふ事は我國現代思想が精神的に何物かを得たいとして居る實證と見。事が出来ると思ふ。然らば吾人は何によつて精神的慰安を求め如何なる信念に住して安心立命する事が出来るであらうか、ニツチエは層つて『危き中に生きよ』と教へたが其危き矛盾の世に生きむとするには自己の理想を標準とせず、人生の事實を事實として存在せしめ、矛盾を見て悲觀厭世する事なく事實の上に蒐事を處し、現在に於ける人生の事實と絶對的價値を認め、現在に於ける肉の生活は限りなき未來の靈の生命にも直接關係を有する事恰かも現世に蒔きたる種の來世に實果として穫得し得るが如きものと確信し眞面目に奮闘努力して一生を送るに若くはかい、而して斯る信念に住せむには其の信仰の基礎がなければならぬ、而してかゝる信仰の基礎は我佛敎中に於て徹底し得らるゝものと確信する。

七、精神界中の最上權威

吾れ人共に佛敎が精神界に於ける最尊無上の一大權威たる事を忘れてはならない。同時に此の寶庫に入つた人々は必ず最尊最上の寶を探求し得て之を自己の力とし自己の財産として世に處し、浮世の怒濤と間斷なき奮闘を繼續せなければならぬ、而して宗敎中にて最高權威を有する敎は、神道にせよ、回々敎にせよ、基督敎にせよ到底比較し得ない敎たる事は言ふ迄もかい事で、僥倖にも吾々は日々其佛敎を研鑽しつゝある一員である已上、現在物質的肉の世界を捨て、精神的靈界を欲求し此に移らむとする新時代の到來したことを知つては、欣喜躍手の舞ひ足の踏む處を知らないのである、然らばその佛敎中如何なる敎法が最高の權威ある敎であるかと云ふとは當然喜ぶべき問題である、仍て今聊か現代思想の傾向より我等の信奉せる本宗の敎義即日蓮主義を批判し如何に現代に適應せるかを述べ、是に皈依して可ある所以を述べて見やうと思ふ。

文學部の幹部から度々の催促を受け何かと思つたが忙しかつたので筆ひ蓄稿を以て其實を免れる事とした讀者請ふ諒せられよ